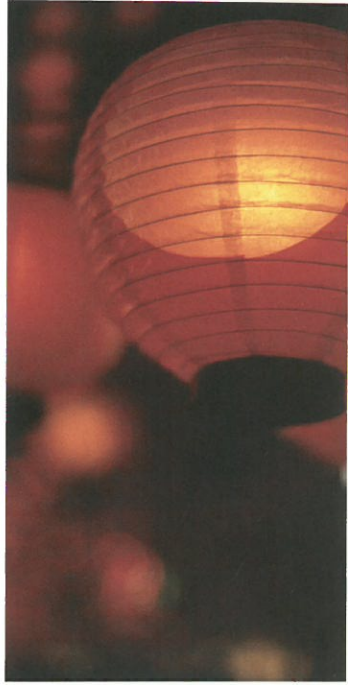
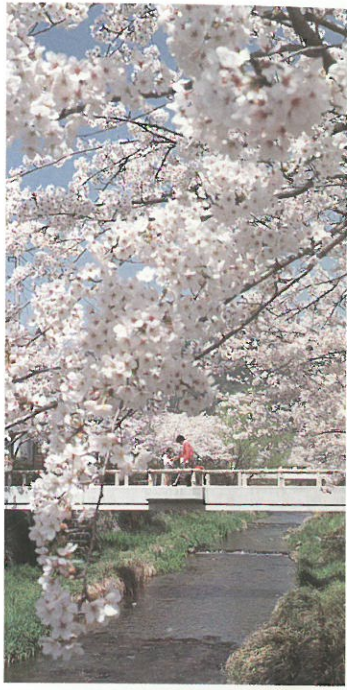


# 山口七夕会

■ 設立10周年記念 ■



山口七夕会

■ 設立10周年記念 ■

10<sup>th</sup>



## C O N T E N T S

ごあいさつ .....	1
設立趣意書 .....	2
設立の経緯 .....	3
活動の記録 .....	4
山口市紹介 .....	9
特別寄稿文 .....	11
会員からの寄稿文 .....	12
山口七夕会会則 .....	26
役員名簿 .....	27

山口七夕会会長  
原野 和夫

## 心は一つ

世田谷区が毎夏、馬事公苑で催している世田谷ふるさと祭りに当時、山口市も参加して赤い七夕ちょうちんを持ち込み、盛大に山口をPRしていました。

十年前、お誘いをいただき私も参加していた時、佐内市長さん達と話しているうちに、山口市出身者はもちろん山口を愛している人たちで年に一度は集まって交流を深めようということになり、山口七夕会が誕生しました。

あれから十年。市長さんをはじめ市の方々や会の幹事さん、会員の皆さんの心が一つになって会が育ち、ようやく青年期に入りました。年二回の交流会や総会で、それまで知らなかった山口を愛する方々と友人になれ、沢山学ばしていただき感謝感激です。

会をより充実し、交流を深め広め、そして山口のPRと発展に役立てればと念願しています。それには、新しい発想とエネルギーを、どしどし注いでいかねばなりません。会員の皆様方のご協力ご尽力を切望しております。

山口市長  
渡辺 純忠

この度、山口七夕会設立十周年を迎えるにあたり、このような記念誌が発行されることは、大変喜ばしく、心よりお祝い申し上げます。

また、平成十一年二月にこの会が発足して以来、ふるさと山口を離れて首都圏で御活躍されながらも、本市の発展を願い、御尽力されておられる会員皆様方に敬意を表し、心より感謝申し上げます。

さて、平成十七年十月に山口市、小郡町、秋穂町、阿知須町、徳地町の一市四町が合併をし、新しい山口市が誕生いたしました。平成十九年十月には新市のまちづくりの方向性を示す山口市総合計画を策定したところでございます。この総合計画におきまして、めざす十年後のまちの姿として「ひと、まち、歴史と自然が輝く、交流と創造のまち 山口」を掲げ、多様で多彩な各地域の特色を活かした新しいまちづくりを進めているところでございます。

現在、自治体を取り巻く状況は、人口減少や少子高齢化、経済のグローバル化が進み、地域経済や都市活力の維持、向上はまちづくりの喫緊の課題となっており、地域の魅力やまちの個性を競う都市間の競争が激しくなっているところでございます。

こうした中で、本市といたしましても、本市の持つ特性や強みを最大限に活かしながら、「まちとしての価値」を創造し、都市としての魅力を高めていくことが重要であり、更には、それらを圏域外へ発信していくことが持続可能な地域経済、または都市活力の向上につながるかと考えているところでございます。

このようなことから、昨年、「ふるさとやまぐち寄付金」を創設し、ホームページ等で本市の取組みを周知し、寄付を通じて本市を応援していただくとともに、お礼に「ふるさとへの便り」として特産品を送付する等、山口の魅力や全国へ発信しているところでございます。首都圏で御活躍をされておられます山口七夕会会員の皆様におかれましても、引き続き「ふるさとやまぐち大使」としての役割を担っていただき、御友人や御近所の方、また、行く先々で本市の魅力を伝えていただき、ふるさと山口を全国へPRしていただきますようお願い申し上げます。

終わりにあたり、本市のさらなる発展のため、今後とも会員の皆様の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、山口七夕会のみならずの御発展と皆様の御健康、御多幸と益々の御活躍をお祈り申し上げます。

## 山口七夕会設立趣意書

## 山口七夕会発起人一同

本会は、山口市を愛し山口市の発展を願う者が、相互の交流を図りながら理解を深めるとともに、ふるさとやまぐちの社会、経済及び文化の発展に寄与することを目的として設立するものであります。

山口市は、来る二十一世紀を目前とした平成十一年に市制施行七十周年という節目を迎えます。昭和四年の市制施行当時、人口三万三千人でスタートしましたが、今では十四万人の都市として着実に発展をしております。

その間、山口市は県都として、また、行政、教育、文化さらには情報都市として発展してきており、近年では、「自然と文化をはぐくみ躍動する中核都市 やまぐち」を基本理念に、山口市のもつ長い歴史や文化、豊かな自然環境を生かした活力ある中核都市づくりを目指したまちづくりが進んでおります。

また、若者にとって魅力ある就業の場づくりとして、「山口テクノパーク」、「鑄銭司団地」、「山口物流産業団地」を整備するなど企業誘致を全国に働きかけています。

さらには、安心して暮らせるまちづくりとして、世界的に環境保全が進められている中で循環型社会の構築に向け、「山口市リサイクルプラザ」を中核施設として廃棄物の減量化や資源化にも積極的な展開を図っています。こうしたまちづくりにより、皆様から「環境にやさしいまち」、「人にやさしいまち」として全国的にも認識されつつあります。

今日、ふるさとやまぐちの発展があるのも、郷土を愛する諸先輩方の教えに負うところが大きく、あらためて敬意を表する次第であります。

この度の「山口七夕会」の設立は、郷土山口市のますますの発展と会員相互のネットワークを広げるとともに、本会とふるさとやまぐちとの情報交換を行うことで山口市の活性化に結びつくものと考えます。何とぞ本会設立の趣旨、目的にご賛同を賜り、お一人でも多くの方のご参加を頂ければ光栄に存じます。ここに趣意書を添え、ご入会のご案内を申し上げます。

平成十一年二月吉日

設立の経緯

平成5年8月	山口商工会議所青年部が東京都世田谷区で開催される「ふるさと区民まつり」に山口七夕ちょうちんを出展
平成9年8月	市からの要請により、東京在住山中・山高同窓会を中心に区民まつりにおいて、七夕ちょうちんの火入れに有志が参加
12月	区民まつりをきっかけ本会の設立についての企画が出され、市関係部、課が協議を行う。
平成10年5月	市関係部、課で設立までの手続き等について協議を行う。
5月	発起の人を要請
6月	発起人開催及び総会開催準備について、市関係部、課が協議を行う。
8月	(仮称)山口七夕会発起人会開催(会場:世田谷区馬事公苑)
10月	会員募集(発起人向け)
平成11年2月	山口七夕会設立総会(会場:中央区日本橋三越本店)

平成十一年(一九九九)

この年二月に設立総会を日本橋三越本店で開催し、山口七夕会が正式に発足。  
また、八月には会場を世田谷区馬事公苑に移し、世田谷区民まつりの開催と同時に第一回定時総会を開催。  
総会終了後は、山口市制七十周年記念ビデオを鑑賞し、ふるさと山口に思いをはせ、引き続き開催された懇親会では、ふるさと山口の話に花を咲かせた。



平成十二年(二〇〇〇)

会場を虎ノ門パストラルへ移し、平成十二年度の定時総会を八月五日に開催。総会終了後には、記念講演会を開催し、記念となる第一回目の講師として詩人の佐々木幹郎氏をお迎えし、「中也の長州」という題目で大変有意義な講演をいただいた。  
なお、この年から会の事務局は山口市秘書課から山口市企画調整課(現企画経営課)へ変更された。



平成十三年 (二〇〇一)

平成十三年度の総会は、八月四日に銀座アスター三軒茶屋賓館で開催し、記念講演会では、大内文化まちづくり協議会会長の福田礼輔氏をお招きし、『歴史・文化のまち山口「山口七夕ちょうちんまつり」』を題目に、特に山口市の礎を築いた大内氏について貴重な講演をしていただいた。



平成十四年 (二〇〇二)

この年四月から、より多くの方に会をPRするために山口七夕会のホームページを開設。  
八月三日には、定時総会を昨年度同様に銀座アスター三軒茶屋賓館で開催した。また、山口市長による講話会を始め、懇親会では、山口ふるさとクイズ大会を開催し、賞品をかけて会員同士大いに盛り上がった。また、会設立当初、多額の寄付をいただいた吉田虎禅氏が逝去された。



平成十五年 (二〇〇三)

山口情報芸術センター(YCAM)が開館したこの年、山口七夕会は、設立五周年をむかえ、会の歩みと活動内容を記録した記念誌を作成。さらには、会員特典として湯田温泉の旅館の宿泊費が10%割引となる割引カードも作成し、会員全員へ配布した。

また、八月二日には場所を日本工業倶楽部へ移し、定時総会を開催。総会終了後、バイオリニスト石井志都子氏によるミニコンサートを開催。「ユーモレスク」、「チゴイネルワイゼン」など五曲を熱演され、一同、間近で演奏される名曲に聞き入った。



平成十六年 (二〇〇四)

この年、会員同士の交流の場を増やすことによって更なる会員相互の交流を図り、会の基盤を強化することを目的に、第一回山口七夕会交流会を開催。

記念すべき第一回目は約五十人の出席があり、「プロ野球の課題」を題目に、元プロ野球パリーグ会長を歴任された原野会長による講演会を始め、会員相互の交流を図った。

また、この年の定時総会は、七月三十一日に昨年と同様に日本工業倶楽部会館で開催。恒例の講演会では、中原中也記念館長の福田百合子氏が「山口市の文化」と題して、中原中也を中心に山口市の文化を丁寧の説明され、会員それぞれが改めて山口市の文化のすばらしさを実感した。



平成十七年(二〇〇五)

一市四町が合併し新山口市が誕生したこの年、旧四町出身者及び関係者の方にも会員の輪を広げることとなった。

七月三十日に日本工業倶楽部会館で開催した定時総会は、旧山口市からの出席者をはじめ、合併を控えた旧四町からも町長及び助役らが駆けつけ、盛大に行われた。

総会后、山口県立美術館学芸員の荏開津通彦氏を招き、「雪舟」を題目に講演会を開催し、懇親会では、参加者らが近況報告をしたり、ふるさとの話題で会話を弾ませた。

また、四月二十五日に開催された第二回交流会では、七夕会会員である北村哲男氏による「裁判員に選任されたらどうするか」を題目にした講演会を開催。さらに、十一月二十八日に開催した第三回交流会では、参議院議員の岸信夫氏をお招きし、時局についての講演をしていただくなど二回の交流会を開催した。



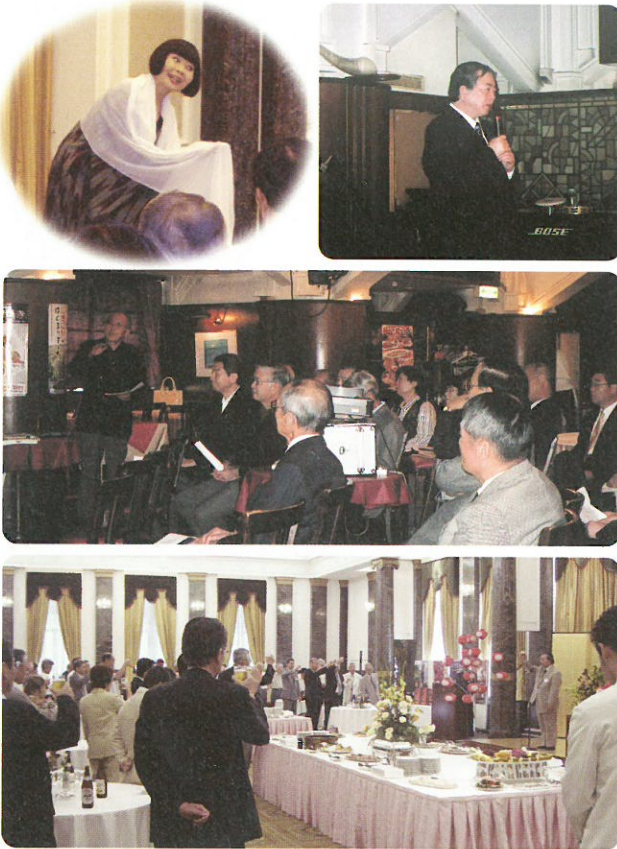
平成十八年(二〇〇六)

七月二十九日に開催された第八回定時総会では、この年の五月に行われた新「山口市」誕生記念式典の映像とともに、山口市民の歌「ふるさとの風」を傾聴した。

さらに、「みずゝが見た夢」を題目に、七夕会会員の小口ゆい氏による講演会を開催し、金子みすゞの詩を通して、日本語の生きた言葉の美しさ、すばらしさも実感させられた。また、この講演会では、参加した会員も詩の朗読に挑戦する等、とても面白い講演会となった。

この年の四月八日に開催された第四回の交流会では、渡辺純忠市長が就任後始めて七夕会へ参加され、今後の山口市の展望や抱負について語られた。

また、十一月二十五日に開催した第五回交流会では、ヒマラヤに登攀された木山克彦氏を向かえ「冒険と夢の旅路―ヒマラヤ紀行」を題目に、スライドの映写を交えながら大変貴重な講演をしていただいた。



平成十九年(二〇〇七)

中原中也生誕一〇〇年を迎えたこの年、定時総会は八月四日に場所を日立金属高輪和彊館に移して開催した。

恒例の講演会では、混乱の幕末期、新しい時代を切り開くため英国へと密航し、近代日本の基礎を築いた長州藩の若き五人の志士たちを描いた映画、「長州ファイブ」の制作委員長である前田登氏を講師としてお招きし、制作の過程や苦労話等、日頃なかなか聞くことの出来ない貴重なお話を伺った。

また、この年も二回の交流会を開催した。まず、四月一日の第六回交流会では、埼玉野村病院理事長・院長であり、七夕会会員でもある野村和成氏により、癌の話を含めた生活習慣病についてのお話をお伺いし、十二月一日に開催した第七回の交流会では、同じく会員で杉原千畝や山本勘介の研究者である渡辺勝正氏をお招きし「武田軍師山本勘介は、山口にいた!」という衝撃的な題目で講演をしていただいた。



平成二十年(二〇〇八)

山口七夕会が発足して十周年を迎えたこの年の七月二十六日に、会場をライオン銀座クラシックホールに場所を移して、第十回の定時総会を開催し、この十周年記念誌の作成すること等をここで決定した。

講演会では、開館から五周年を迎える山口情報芸術センター(YCAM)館長足立明男氏をお招きし、「ア・ビュティフルシティー-YCAM」を題目に、YCAMの活動を始め、専門である浮世絵の話も織り交ぜた講演に会員一同耳を傾けた。

四月五日に開催された第八回交流会では、NHKアウンサーの山本哲也氏による「放送は人のおもしろさに尽きる」を題目にご講演いただき、十二月二日の第九回交流会では、政治ジャーナリストの岩見隆夫氏をお招きし、ねじれ国会における微妙な政局について貴重なお話をいただいた。

また、この年から、七夕会通信を発行し、市報と一緒に会員全員へ送付し始めた。



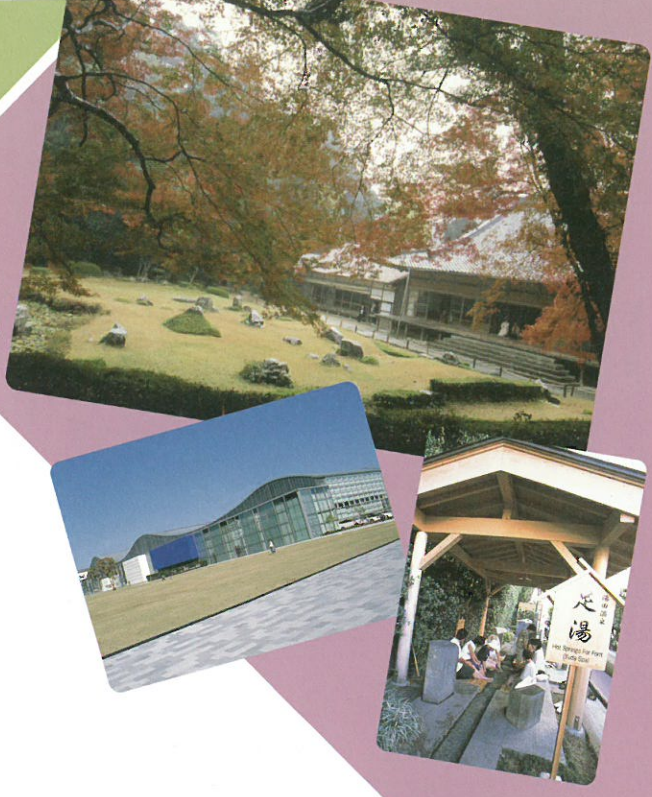
歴史と文化の薫る

# 山口地域

瑠璃光寺五重塔や、常栄寺雪舟庭など史跡が点在し、大内文化の薫りを色濃く残すまち山口地域。

さらには、近代文学を代表する叙情詩人「中原中也」をはじめ、漂泊の俳人「種田山頭火」、私小説の「嘉村礒多」など山口ゆかりの文学者が名前を連ねるとともに、現在は、平成十五年に開館した山口情報芸術センター（YCAM）を拠点に「情報」と「文化」を融合させたメディアアートなど、世界に通用する新たな山口文化を創造し、東アジアをはじめとする全世界に発信しています。

また、傷ついた白狐が温泉に足を浸してその傷を癒したと伝説をもつ湯田温泉では、良質な泉質の湯を、五箇所ある足湯で身近に体験できます。



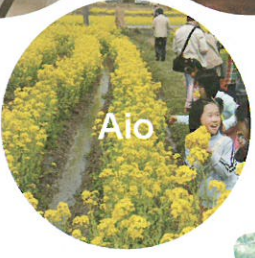
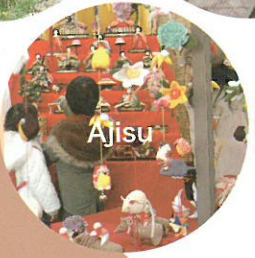
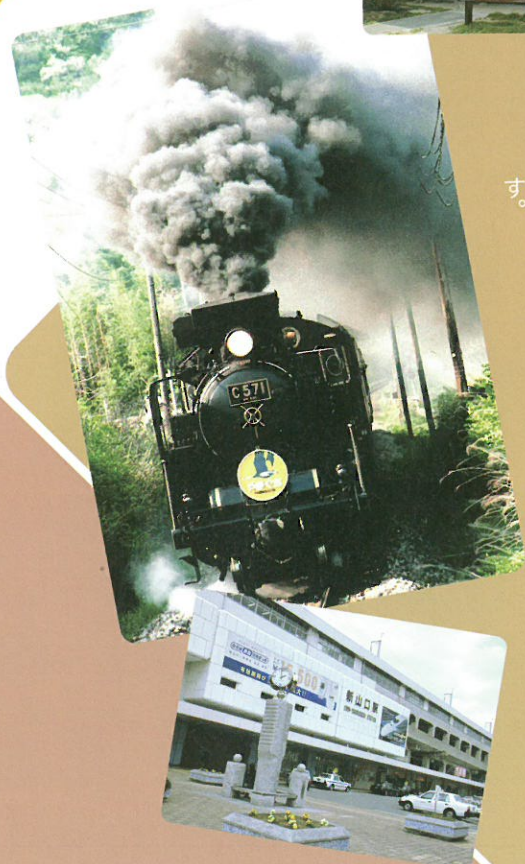
山口の玄関口、鉄道のまち

# 小郡地域

新山口駅がある小郡地域は、多様な人々が往来する山口県の陸の玄関口であり、県内を管轄する事業所等が数多く集積するなど、公共交通の結節点であり産業交流拠点として成長をしています。

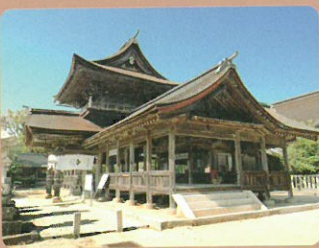
この小郡地域は、古くから鉄道の町として栄え、現在でもSLやまぐち号の発着点として多くの観光客が訪れます。

さらには、俳人種田山頭火がもっとも長く定住した「其中庵」が再現され、山頭火の生活を垣間見ることができま



# 秋穂地域

法境の里  
車えびの養殖日本発祥の地であるここ秋穂地域は、瀬戸内海に囲まれた穏やかな地域です。毎年八月下旬には、生き車えびを干潟に放し、一斉に素手で捕まえ、その数を競う「えび狩り世界選手権大会」という、えびの町秋穂ならではの行事を開催し、国内だけでなく海外からの参加者で賑わいます。

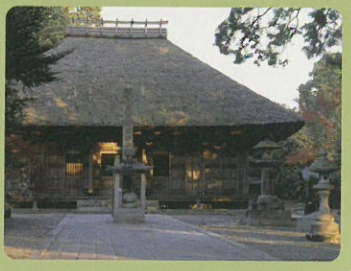


# 徳地域

緑と水と伝統の里  
鎌倉時代に重源上人が、東大寺再建に必要な木材を運び出したとされるこの徳地域は、水と緑が調和する自然豊かな地域です。

この地域の三谷地区では石垣の棚田が現在も残っており、昔からの原風景を今に伝えています。

また、平成十八年には、日本初となる森林セラピー基地に認定され、全長一〇、六〇〇mのセラピーロードは、高低差の少ないフラットな道が続き、子供から年輩まで幅広い年齢の方が森林ウォークを楽しむことができ、また森の持つ癒しの効果を体験することができます。



それぞれの歴史や自然、文化を持つ  
五つの地域が輝くまち  
山口市

# 阿知須地域

蒼い海がきらめく  
平成十三年に開催された山口きらら博会場「きらら浜」があるここ阿知須は、古くは廻船業の港として栄え、これらを生業とする人たちが建てた、瓦葺き漆喰大壁を有する居蔵造の住居が今でも立ち並び、白壁の町並みとして受け継がれています。

この白壁の住居の一つである旧中川家住宅が、「いぐらの館」として平成二十年四月から一般公開されており、廻船業の用具や生活用品が展示され、当時の暮らしを垣間見ることが出来ます。

また、福岡県柳川市の飾りつけ「さげもん」をヒントに、赤や青等の布やちりめんを使い、まりや人形、今年の干支等をつくり、一本のひもに七個吊り下げる「ひなもん」を、阿知須商店街に色鮮やかに飾る「ひなもん祭り」が開催され、多くの方で賑わいます。



# 中也と私の中に吹く風

小口 ゆい



photographer  
大山 雄大

平成十三年四月、山口市で開催されました第六回中原中也賞贈呈式で「中也の長州方言による朗読」と題して、山口弁で中也の詩と中也の母・フクさんの口述本からの抜粋文を語らせていただきました。

山口から離れて久しく、上京後は演劇活動にのめり込み、標準語の修得にはかり心が向いておりましたので、失われかけていた山口弁を取り戻すのに一苦労でした。ずーっと山口に居る同級生と、両親の介護の為にウターンした同級生に連絡を取りました。一人の友には台本を送り、山口弁で吹き込んでもらいました。もう一人の友は、わざわざ今は亡き中学の恩師を訪問し、自宅療養中の恩師とのインタビュー形式で山口弁について収録してくれました。送られて来た温かい声を頼りに、フクさんの語り口に少しでも近づけないものかと特訓しました。

その成果でしょうか。贈呈式当日、同級生達の見守る中、語りを聴いて下さっている会場から笑いが興きました。終演後、中原中也研究の第一人者で詩人の佐々木幹郎氏から「鳥肌が立ちましたよ、フクさんの語りは貴女にしか出来ないよ。」と、身に余る賞賛のお言葉をいただきました。以来、是非フクさんから見た中也を舞台で語ってみたいと想い続けてきました。中也に関する本を読み漁り、親子関係や時代背景などを探るうちに、以前にも増して中也が愛しくなり、その魅力に嵌まって行きました。「本当は孝行者だったんですよ・・・」という中也。教育熱心な両親の期待を一身に受けていた中也。その親の願いに反して文学に目覚め、膨大な読書量と凄まじい探究心、人を求めて止まない行動力で東京という大都会に挑んで行った中也。けれど、中央詩壇で名を挙げて帰山は出来なかつた

中也……。彼の若すぎる死後、小林秀雄・大岡昇平・吉田秀和氏らに依り展開されている中也論は「天才中也」を証明しています。

大岡昇平著「中原中也（講談社文芸庫）」の冒頭「昭和二十二年一月の或る朝、私は山口線湯田の駅に降りた。小郡で満員の山陽線を捨て、支線の列車が緩やかに榎野川の小さな谷に入って行くにつれ・・・」という下りをライブ公演で引用する度に、私の中学・高校時代にタイムスリップします。都会の坩堝の中で緊張し合って、すり減っている心がふっと和むのです。ふるさとを離れたからこそ、山口の風・匂いを中也の詩を通して強く感じます。中也の詩は歩きながら朗誦するリズムにピッタリです。「こんな素晴らしい日本語に出会えて幸せ！」と思えるのです。

念願が叶って、平成十九年十月、六年越しのフクさんの目を通した中也の世界「子守唄よ」を、中原中也生誕百年記念公演として、山口・東京で上演することが出来ました。一番印象深かったのは、私の出身小学校の子供達が、舞台のクライマックスに合唱で参加してくれたことです。中也の詩が次世代の子供達に確実に受け渡されている喜びに包まれました。山口市、中原中也記念館はじめ、多くの皆様にご支援いただき深く感謝申し上げます。

二十一世紀は、インターネットで瞬時に世界と繋がる時代です。山口から世界へと、山口ウェブを起こしましょう。中也の持っていた感性で、何かを感じたらその場に行って体験し、自分の心からの感動を形にしていけたらと願っています。

私は、人と人を繋ぐ言葉の大使になりたいと思ひ、「子守唄よ」の公演終了後から英語と日本語での表現活動にチャレンジを始めました。ふるさと山口で、何かコラボレーションができれば楽しいだろうなあと思っております。

この度の寄稿文は「私の思う山口の魅力」と題して、会員皆さんのそれぞれの視点から、ふるさと山口をPRしていただきました。

## 「ふるさと山口海」

石田順康

鳳凰山の美わしき  
高き姿を縹渺の  
雲井はるかに眺めやり  
近くは清き榎野川……

土井晩翠作詞の小郡中学校校歌である。帰郷のとき、新山口駅の新幹線ホームから眺める東鳳凰山は均整がとれていて美しい。私の生家は小郡の駅前旅館で、昭和三十年に山口高校を出るまでここで育った。

明治三十三年開業以来の小郡駅が改名されたことには、やや淋しい思いもあったが、「新」が付く地名は多いのである。私が米国のニューヨークに在勤したおりに住み暮らしたのは、ニューイングランド地方の入口にあるニューロッシェルという街であった。いまでは、新山口という駅名にも慣れてきた。平成大合併で、山口市は南の方へ、海まで広がった。これから、ニュー山口が太陽に向かってさらに発展することを期待している。

私は、永いあいだ山登りとヨットに親しんできた。冬山や外洋レースに熱中したこともある。山口の中心市街をとりまく山なみは、雪と岩によるわれた峻厳な山岳ではなく、やわらかな稜線の低山である。また、榎野川が流れ込む先は、怒濤さかまく大洋とちがって、白砂青松のおだやかな瀬戸内海である。中原中也の詩のように、山口では「吹き来る風」も癒やしなのだ。わがふるさとには、懐かしい山や海、やさしい自然がある。

## 「私が思う山口の魅力」

板藤 滋

一口に山口市と言うと、現在では市町村合併で、旧山口と新山口とはかなりの差異が生じるようになってしまいました。その代わり対象も広くなったのですが・・・依って「私の山口」となると、旧山口市となります。

旧山口には歴史とその遺産、自然と環境、山口人の気質等各々に優れた点も有りますが、かと言って全国有数と誇るほどでも無く、まあ中程かと言った所ではないでしょうか（多少謙遜して言うと）。ところがこれらを総合して見ると、例えば経済基盤の弱さは否めない代わりに静かなたずまいが有るとか、そこにまた違った姿が見えてくるのが山口ではないかと思われれます。言うなれば「中庸の安

らぎが有る所」。これが最大の魅力だと思ひます。

従って、住んで良く、又訪ねて良く、何とも収まりが良く心地良い所ではないでしょうか。

文化的、歴史的、自然環境的にも程よいバランスを保っており、居心地が良い。このバランスの良さは全国的に見ても中々の物ではないかと思ひ、貴重な存在だと思ひます。

ただ今後これの維持と加えて発展性の確保に十分な意を用いる必要があるでしょう。

維持と発展には、本質的に二律背反的な所も在り、又人まね的な新企画では成功は期待できないので、創造的な革新が求められるところ。関係者の一層の御努力に期待するところとす。

さすれば今後も山口の魅力は色褪せる事無く、次の世代にも受け継がれていく事でしょう。

## 「私が思う山口の魅力」

岡本浩次

山口は、大内時代から「能」が盛んであったといひます。野田神社には地方では少ない能楽堂があります。そして、明治の始めに宗家が廃絶した「鶯流狂言」が、山口の人々で伝承されていて、昭和二十九年には、「山口鶯流狂言保存会」が組織されたのです。平成九年





には、国（文化庁）から「無形文化財」の選定を受けています。

「能楽」は、ユネスコから「世界遺産」とされています。「世界人類の文化遺産として保存されるべきもの」としての誇れる文化財が、山口にあることは、すばらしい魅力ではないでしょうか。

これを、市民の能楽愛好者で発展組織化し市が支援されて、全国さらには、世界に発信されることは、夢ではないと考えます。

今、山口市には、相当の人材もおられると聞きます。山形県鶴岡市の「黒川能」のごとく有名になる素地はまだ地の下に埋まっていると思わざるをえません。

## 「私が思う山口の魅力2」

岡本浩次

東京の生活が五十年をこえてしまい、「私が思う山口の魅力」と問われますと、今では懐かしい味の「外郎」と「舌鼓」といつてしまいます。辛党一筋で来ながら、近頃は甘党に諸般の事情で変えました。幼少時代、大好きだった叔母のお土産の外郎と舌鼓のなんともいえないおいしさが、よみがえってきています。とくに外郎は、御堀街道の松並木と福田屋の縁側で食べられた戦前のことなどを思い出します。そして、昔のように蕨粉を材料にしているのかなと考えたりしています。

また、舌鼓は嘗て身内の農家で糯米を契約栽培していたことから、今はどうしているのかなと思いつながら、先ごろ三越で求めたものを賞味したばかりです。

菓子は和菓子を好むようになりました。この二つの、私にとっての大切な山口の魅力銘菓が、全国で最高のお茶菓子として有名になることを期待します。

## 「私が思う山口の魅力」

小川勝義

新山口駅（旧小郡駅）、駅頭の種田山頭火の銅像が、よく帰ってきちゃったね、お疲れさまとあって、迎へてくれる。そこにうたわれている詩を辿って行くと、山手の庵（其中庵）へと誘われる。眺めの良い高台に、静かにたたずんでいる庵を見るにつけ日夜酒を愛し、詩を詠んだ往時が偲ばれる。彼は温泉が好きで、湯田温泉へはよく出掛けた。旧国道九号線あたりと思うが、その途中、仁保津に一人の俳人が住んでいた。後日私の小学校の同級生はその俳人から物事を教わったことがあると語っていた。彼は、山頭火の弟子と思われるが、誰かは今としては不明である。湯田温泉に通った地に句碑があり、通りをはさんで中原中也記念館が生地にある。二〇〇七年は生誕一〇〇年を記念して各地でイベントがあり一大中ブームがあった。隣りの高田

## 「私が思う山口の魅力」

河合正克

山口を離れて五十年近くになるが、今の自

分を育んだ風景はすべて山口市にあり、私を引き寄せる。数年前に、法事で帰省して、地元湯田温泉の松田屋に初めて泊った。この宿は江戸時代から三〇〇年以上も続く老舗で、幕末維新の重要な舞台になった所である。高杉晋作はしばしばこの場所で討幕の密議を行った。また、慶応三（一八六七）年九月には、山口にやってきた西郷隆盛と大久保利通が、木戸孝允と会見し、薩長同盟を確認して、倒幕出兵の具体的計画を練った。その遺蹟が今も残されている。私の祖父と祖母は、それぞれ秋穂と大島郡の在郷から藩庁所在地山口の堅小路に出てきて、河合大内塗を再興した。今に伝わる大内塗りのデザインである大内菱と萩の紋様の原型が河合家に残っている。昭和十三年三月生れの自分は、幼少時に祖父に連れられて、八坂神社と菜香亭に隣接する河村写真館で撮った記念写真が当時を想い起こす。県下ではじめて開園された明星幼稚園に通い、雪舟の庭で遊んだ。ウエルス園長先生が懐かしい。桜の季節になると、なぜか瑠璃光寺ではなく、古熊天神様の境内に一家総出で重箱を持参して、花より団子を楽しんだ。我が家の大内塗工場の裏道を抜けると、十朋亭から大殿大路、大内家の菩提寺である龍福寺に出る。萬代醤油の息子と一緒に竖って堅小路から一の坂川まで巨る錦小路の醤油工場、トロッコを動かしたものだ。戦時中、学童疎開で通った洞春寺や十三代藩主毛利敬親の墓所である香山公園ではチャンバラっこをした。天誅だあ、と言ったかどうかは覚え

ていないが、鶯張りの石畳の上で奇声を発すると気持ちよかった。中学生になると竹馬の友と大晦日から元旦にかけて神社に初詣をすることを毎年続けた。鴻の峰の大神宮から始まって野田神社、豊栄神社、八幡神社、宮野の三宮神社、古熊の天神様とひと回りすると空が白み始める。歩きながら途方もない大きな夢人生を友と語り合ったものである。

## 「私が思う山口の魅力」

國司由行

生まれ育った山口市よりも他県での生業が半世紀を越えた私は、最早長州最良の異邦人かも知れない。街には住み続けてこそ判る価値と、離れてみて初めて歴史や文化、産業の表情に気付かされることも多い。

山口市の歴史文脈には、室町時代大内氏が開府以後七代にわたって華麗な「西の京都」を創り、江戸幕末毛利敬親が東の間の拠点を萩から山口へと移して、維新の舞台として息づいた。

しかし、現実には（一）大内文化で名残を止めるものは、五重塔や点在する神社のみで貴重な文書も今は幻、大内氏滅亡の際、館共々灰塵に帰した。（二）山口市民と毛利家の関係も萩の歴史の重厚さに圧されてか、維新の拠点となったにも関わらず毛利色は極希薄と言える。文久三年（一八六三）から明治迄僅

公園には各種の碑とともに中也のものでは、大岡昇平の作による中也へのメッセージがあり、山頭火の句碑もみられる。九号線を山口へと行くと、亀山公園で「山林に自由存す」と記された、国木田独歩の碑に出くわす。

この句碑は各地にあるようだ。彼は千葉の銚子の出身だが、父親の関係で幼少年代を柳井近辺で送った。旧制山口中学にも在籍していたこともあって、この地に句碑が建ったと思われる。山口から宮野へ向かうと常栄寺雪舟の庭近くに、嘉村礒多の文学碑がある。

彼は仁保上郷の出身で若くして、この世を去ったが、彼は私小説家として彼が生まれ育った風景が実にうまく描写されている。彼の生家は、最近市によって保存され、地元では読書会が始まり礒多への関心が高まったと聞いている。私はこの九号線のルートは好きな道で、ひそかに山口文学プロムナードと命名している。この三十キロメートルのルートに、かくも有名な文学者を輩出したことは山口の誇りであり、後世へ伝えていきたいものである。また多くの人に、この文学プロムナードを知ってもらうことは山口の魅力を増加することだろう。

か五年足らずでは維新遺構も数少なく、迫力に欠けても止むを得ないかもしれない。逆手にとり裏腹に考えればそのハンディが魅力になる。

山口市は静寂な街、歴史を感じる、一の坂川沿いの情緒が良い、落ち着く街等と聞かされ瑠璃光寺と雪舟の庭は知名度の高い事が判る。魅力ある街とは、一の坂川沿いの住民方の如く直にその生活感が伝わり、守り残そうと云う熱意を積み重ねた価値ある街並みの事であろう。山口は観光地ずれの起こる街ではなく「地味と品格」で勝負とさえ思う。

私の些々な願いは①華麗な大内文化の解説展示館を縁の地に造る②長府毛利藩主の屋敷は大きからず小さからずその瀟洒な佇まいに感服したが、山口にも毛利敬親の隠居所が明治の初めに建てられ、通称「野田御殿」があった。今なら立派な明治重要建造物、行政は何かの勘違いでこれを解体した。その罪滅ぼしではないが幕末期から残る適当な武家屋敷を、菜香亭横に移築すれば野田毛利別邸の跡地も息づくと思う。③木町か上堅小路の一部を町並景観として保全等、最良筋の戯言とお許しください。山口の魅力は地道だが暮らしの場を愛し、保存再生に元氣な人々の姿です。

## 「私が思う山口の魅力」

児玉秀文



私は転勤族で、現在十回転勤し東京は四度目の勤務で五年目となります。

今までは仕事が忙しかったこともあって、山口出身者の自覚はありませんでしたが、正直に言いますと郷里の会合へ参加するまでの気持ちはありませんでした。

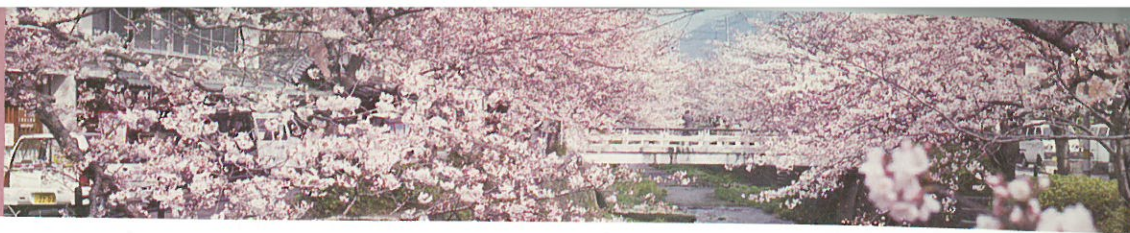
ところが、五十歳を迎えて定年後の終の棲家をどうするか妻（同じ山口出身）と話し合った結果、四箇所あった候補地から故郷の山口へ住むことを選択した直後に五十五歳で大阪から東京へ転勤となりました。決断すると早い行動をモットーとしていた私は、大阪勤務も三回目で最初の勤務時に建てたマイホームに久しぶりで住んでいたのですが、ちょうど良い機会だと直に売却し、山口にあり生まれ育って当時は親が住んでいた家を建て直しました。

東京へ転勤後は積極的に、白中・山高の同窓など山口関係者と接触を始めた中で、山口県東京事務所片山所長（山高の二年先輩）に転勤のご挨拶に伺った処、その当日山口市に縁のある人々の集う『七夕会』が開催されますが参加しませんかと誘いを受けました。これも縁だと思いついたので山本幹事長へ連絡をして頂き初参加となったのです。出席してみると山高同期の仲間もいれば、郷里出身の先輩諸氏とも交流をさせて頂き本当に良かったと思っております。また、仕事柄北海道から沖縄まで走り回る出張族でもありませんので、全国行く先々で美味い料理と地酒を味わいながら山口に縁のある人と交流したり、

懐かしさと共に還暦を迎える私にとって自分を育ててくれた山口を改めて思い起こさせてくれました。

昭和三十六年からの中学時代は亀山の麓でザビエル記念聖堂の鐘の音を聞きながら過ごしました。当時は亀山の周辺には山大の本部、経済、教育、文理学部などがあり、博物館、図書館や県の主要な施設が並び田舎者にとっては印象深い都会であったと記憶しています。遠距離バス通学であった為に時間の制約はありませんでしたが、帰りの道草は亀山公園、一の坂川周辺、道場門前をウロウロ、腹がすいたら安くて美味しい「亀山ラーメン」、人目を気にして「グリーンパーク」など、今から思えば十分に満たされ中学生生活を楽しんでいました。少し足を延ばせば香山公園、瑠璃光寺、雪舟庭など歴史にも触れることが出来、当時はそれほどの認識はなかったのですが、本当に恵まれた環境であったと思います。高校時代の三年間はあまり道草は出来なくなりましたが、汽車（SL）通学、山口駅からの長い通学路もあまり苦になりませんでした。

今でも年に二、三回山口を訪れますが、当時から随分建物も変り近代化されていますが、基本的な雰囲気は変わっていないと感じます。仕事の関係で全国の色々な地方都市を見てきましたが、やはり山口に優る町はありません。しつとりと落ち着いた町の雰囲気は山口を離れて改めて強く感じると同時に、私にとって将来住んでみたい町の有力候補になっています。各地方都市の空洞化、衰退が加



現地の人には山口の良さをPRしています。実は二〇〇九年一月で六十歳の定年を迎えますが、六十五歳まで勤務できる再雇用を選択せず人生は一度しかないのでもうここでリセットして元気なうちに山口市へ帰り、新しい人生にトライすることにしました。山口に住んでも、私は旅行や友達付き合いが好きなので子供三人も東京で独立し家庭を持っており、時々は上京し『七夕会』へ参加させて頂きたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

### 「山口の魅力」

酒井和夫

終戦のどさくさの中で、もともと大陸に近い親戚の居る山口に引き上げて以来高校卒業まで山口で過ごしました。その十三年間は長くはありますが、幼児から青年までの多感な時期で私の人格形成や、知己形成に大きな痕跡を残しています。

その後生活した東京や、北九州、房総地区との自然の大きな違いを感じます。子供の徒歩の距離に山があり、川があり遊び友達が居ました。すでに親兄弟や、自宅もありませんが久しぶりに山口に帰ると周囲の山並みを見て実感として「山懐」という言葉の持つ安心感を覚えます。山際は曖昧な地平線を隠し、方向感に確信を与えてくれます。底まで見える清冽な川は魚の存在を予感させます。

速している中で、何としても山口だけは頑張つて欲しいと期待しております。

### 「私が思う山口の魅力」

高橋紀夫

私が山口に住んで居た時期は、中学・高校を通じての六年間で、今からもう五十年昔のこととなります。その後今日まで、折にふれて山口を訪れていますが、私の山口は、美しい自然がよく保たれ、おだやかな風物に囲まれた小じんまりとした盆地で、いまだに心安らぐ魅力的な町として存在し続けています。そして、そのことは、次のような理由により強いものになっているのかもしれない。

それは「樫野川」での釣りの思い出です。中学校の同級生の家が、駅通りの「釣具屋さん」で、私はそこで初めて「毛針」なるものを知りました。「毛針」は色とりどりの毛で形作られ、それぞれに名前がつけられていて、初めてそれらを目にした私にとっては、美しい魔法の道具といった感じでした。六、七種類の毛針をつけた仕掛けを作って、日没前後の樫野川に出かけた私は、その面白さに夢中になりました。川の瀬を道糸を張った状態で流す毛針釣りは、魚の当たりが「グリーンダレン」と道糸を通じて竿を握る手元まで直接伝わり、得も言えぬ感触で、そのワクワク感、面白さは、言葉では説明し切れないものがあります。そ

箱庭的に明快・透明で美しい自然の中で、正義感や、一本気と、あまり茫洋とは出来ない氣質を得たように思えます。他県人との交流が広がるにつれその思いを強くします。そのせいか山口高校同期会の仲間の似たもの同士は信頼関係で深く繋がっているようで、会合は年々盛んになります。

自然自慢だけなら勝てない景勝地に故郷を持つ人も沢山いると思いますが、そこに人の営みとしての歴史が深く染みこんでいるところが並とは違うところでしょうか。大内文化、毛利の治世、維新の活躍が、いわれのない自信として心中深く住み着いているようです。

山口定住は出征中で不在の父に代わり母の下した判断で、すでに幽明界を異にしている母ですが、遅きに失した感謝をしたいと思えます。

### 「山口の思い出」

末繁哲雄

山口を離れて四十年、昨年春から仕事の関係で東京勤務となり七夕会の仲間に入れて頂いております。元々は宇部の山奥生まれではありますが、中学、高校と六年間を山口で過ごした事から入会資格を与えられた様です。七夕会に参会して久々に再会できた同窓生や諸先輩の皆様との出会いを通して青春時代を過ごした山口の思い出が鮮明によみがえり、

して、不思議なことに何度釣りに行っても、一度も他の釣り人に出会わなかったことです。今思い出しても自然の中に包まれて、周辺が真暗になるまで一人竿を振るう至福のひととき、もう二度と味わうことは出来ないだろうなと思います。この経験と記憶が山口の思い出をより一層自然に富んだ美しいものにしていくのではとも思います。

今、この時代に、私の年令で樫野川に釣りに出かけたとしたら、はたして川の状態はどうなのだろうか、大勢の釣り人で賑わっているのでは、などと思いを巡らすことも可能ですが、私としては、昔の樫野川「でそつと仕舞っておきたい気持ちの方が強いように思います。私の山口は五十年前の素晴らしい姿のまま、私の心の中に生き続けて欲しいと思っています。いるからです。

### 「私が思う山口の魅力」

鶴岡信一

三方を山に囲まれて南に開いた盆地、山口線も樫野川も一の坂川も北から南に流れる。土地は川に向かって緩やかな傾斜があり、平地の家並は大殿一帯だけ、他は街道沿いに栄えた街、然し嘗ての萩往還周辺は既に何もない。この街には風呂屋と酒屋以外に煙突はない。

学校は官立山口高校、官立山口高商、県立師範、県立山口中学、五年制の県立山口高女

があり、私立も女専、三つの中等学校があった。寮、寮宿舎、下宿、賄屋などを含めるとこの人口は全体の二割前後になっていたのではないかと。物静かで落ち着いた街であった。然し盆地なるが故に四季の変化に富み、春の桜、夏の螢は思い出深く、湯田温泉は春日頃の憩の場であった。

こんな街で、昭和十年から十七年までの七年間お世話になったが、始めの五年はラグビー一筋、お陰で人生一生の困難に立ち向う体造りが出来たし、後は真善美を求めた思索と情操の涵養、友と語り青春を謳歌した二年半であった。

山口は変わらない街、いや変化がないのが山口と云っても良い。然しこの六十年で、異様に巾広く感じる道路、官辺箱物行政の名残り、流通近代化の施設、集合住宅の出現が目につき、逆に学校は殆ど市外に移転してしまっただけだ。

こんな山口が平成の大合併で人口は一・四倍、面積は二倍のグレート山口になった。合併都市の共通課題は、都市としての一体化の形成と発展の方向づけと聞いている。公と私、公共、商業、工業、農水と更には福祉をどう組み合わせるかと聞いている。然し効率的な発展の姿を画くかというところらしい。

然し何処でも絶対に必要で且つ誰もが一応賛同する施策は教育の振興である。ある歴史経済学専攻の先生から、幕末の日本の庶民教育は世界一、日本では防長が抜群であったので、山口県は世界一の知的水準にあったとい

に活躍した井上馨の旧宅跡で、現在は高田公園という名前になっている）があり、子供の頃のように遊び場であった。又、山口線の湯田駅を超えて平川に向かって行けば、榎野川（ふしのがわ）の清流があり、よく泳いだし、螢の名所でもあった。湯田は温泉地でもあるので、旅館や飲み屋が多く、昔は遊郭もあった三業地で、悪童達はどうしても早熟にならざるを得なかったように思う。中原中也さんも、そういう土地柄に育ったせい、超早熟で、旧制山口中学在学時代に年上の女性と京都に駆け落ちしている。中也さん（私の祖母はそう云っていた）は、早熟の天才ではあるが、封建的で保守的な土地柄では、ひんしゆくもの不良であり、絶対にその生き方を真似してはいけない人であった。中也さんの詩集を読むと昔の湯田の怠惰で変化のない雰囲気がよく伝わってくる詩がいくつもあつた。

私が思い出す湯田はそんな町である。しかし、怠惰で変化がなくても、湯田はまぎれもなく私の生まれ故郷である。湯田から山口の旧市街へ行くと、そこには何となく文化というものが感じられたものだ。昔から大きな工場などは全くなく、県庁や市役所それに学校を中心とした街が形成されており、環境のよい文教地区という感じだった。今もたまたま帰って歩いてみるとその印象は変わっていない。山紫水明というのが山口なのではないだろうか。日本全国に小京都と云われる町は数多くあるが、山口はその中でも小京都と呼ばれるのがふさわしい町ではないだろうか？昔は怠惰で

う話を聞いた。今は三十位以下、山口は県の教育の中心的存在であった。今はどうだろう。私は教学という言葉が好きである。指導力ある教育と学究の情熱が一体となった姿が浮かぶからである。教育が盛んな街、学都と云われる都市を訪ねると、何となく引き締まった教学の威厳というものを感ずる。例えば仙台、更には松本、学校だけでは文化施設、公園も含めて街の佇まいから醸し出される風格だろうか。山口がこんな街として発展して行くことを期待する。進学率の向上、スポーツの強化はその結果として来るもの、産業の振興も永い眼で見れば決して無縁ではないと思う。

「私が思う山口の魅力」

富田捷治

山口から関東に居ついて四十年、うなぎや、鮭のように故郷は忘れることはない。私そのものが山口の人間だ。

山口の悪口を言われると気分が悪くなってしまう。都会の通販ルートに開発したちばの安心な製品を主力として販売していることから、ぜひ山口の産物も普及販売に貢献したいといつも考えています。山口と言えば幕末の動乱志士の活躍が一番関心があります。もつと山口に由来する志士達の活動のルート等について、バスツアー等で知りたいと思います。

変化のない湯田や静かな山口の町に反発心も感じたりして結局故郷を後にしたのだが、年を取った現在、変化がないのも大きな魅力ではないかと思ひ感じ次第である。

「平安の地」

原野和夫

たまに山口に帰り、静謐でさわやかな空気とたたずまいの中に身を置き、やわらかな山口弁に接すると心がなごむ。中也が詠ったとおり「これが私のふるさと」の思いを深くする。山口の第一の魅力はもちろん、その自然と人とのたたずまい。やさしい山なみと田畑と川の流れ、そして人の温もりが私の少年青年時代を育んでくれた。その魅力は今も変わらない。

多くの市の県庁がコンクリートの高層ビルに囲まれ、周囲の道に車がひしめいて落ち着きがないのに比べ、山口の町はしっとり落ち着いた感じがする。

経済的、文化的にもう少しは刺激があってもいいと思うが、盆地のわりには気温の変化はそう大きくないし、第一、大きな災害がない。この天然自然は天恵である。（1945年四月、米国の原爆投下目標検討委員会の初会合で、山口が十七の目標都市の一つに入っていたそうだが信じられぬ思いだ）

静謐さとそれをもたらした歴史と文化、大

山口の産物について、産業についてもツアーが欲しいと思います。そこで、もつともつと都会の人と話し合って欲しいと思います。山口弁をたくさん教えてあげてください。標準語は一切使用しないと面白いと思います。どんな県民性の方が江戸を改革したのか大変な関心です。山口と言えば「通の方」には、文化的には、大内文化かもしれない。もつとあの時代の京の状況と連動しながら「足利時代と大内文化」とか連動した観光ツアーは面白い出来そう。かな。そんなツアーに参加した時には、食べもの観光がとても楽しみです。小郡に降りたら、めっちゃめっちゃ面白い名物「ふぐどん」を、山口に降りたら、文化都市らしくないかも知れませんが、「ふぐまん」、「栗まん」、「日本一たこ焼きまん」を名産に作りなはれ。外から見ると山口に行ったら食べたいと思ってしまう。売りますよ。美味しい山口米も利用してどんどん面白くしてください。

「私が思う山口の魅力」

原田俊明

私にとつての山口とは、まず生まれ育った湯田（今は湯田温泉町といっているが）での思い出である。住んでいた家から数百メートルのところには詩人中原中也さんの生家があり、同じ位の距離のところに井上公園（明治時代

内時代からの文化の残照と、明治維新にまつわる歴史が残した文化や史跡と人々の思い、その伝統に育まれた学問の心が今も学生を大事にする山口の気風に生きている。それが内外の学徒を惹きつけ、文化・研究・芸術の町として発展する素地となっている。

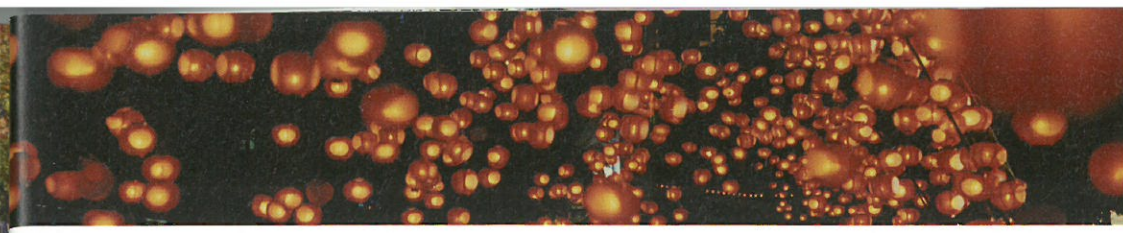
瀬戸内、日本海両方の食文化、東アジアの人々との交流の地の利も良い。

自然と文化と人とその交流と。それは争いごととは無縁の、平安の地の利。独得の魅力が人を活かし元気づける。

「私が思う山口の魅力」

久永洋子

山口短大（現県大）の同窓会に出席し、墓参をするという習慣が十年位続いています。十年前、久しぶりに帰山した折、私が感動した故郷を三つあげますと、一つは坂川の滔々と流れる豊かで美しい水です。二つ目は、国宝瑠璃光寺の五重の塔で、見る度に心が引き締まる思いが致します。三つ目は、女学生時代湯田の祖母の家から通った道です。権現山の下を通り山裾をぐるりと廻り込むようにして細い道を巡るとトンボやメダカがいる小川がサラサラ流れていて、左手には山を借景に洒落た家がポツンポツンとありました。やがて右下に旧制山高、左手に鴻の峰を見て通いました。この道は又、様々な思い出と共に忘





れ難い私の少女時代の原風景の一頁となつて  
います。今はこの道は家が密集して昔の面影  
は少なくなりましたが。今年も又、四月に  
帰郷致しました。故郷は美しく優しく、何時  
も変らず（景色は変りましたが）私をすんな  
りと大きな懐に包み込んでくれました。

ところで、今夏孫の高校二年生の男の子が  
初めての一人旅で祖父の墓参りに行って来まし  
た。一度も会った事のない祖父のこと、それ  
と私の故郷がどんな処か遙々出かけて帰って  
来ての感想「秋芳洞が素晴しかったなあ!!」で  
もバス代が高くてお小使いみんなバス代にと  
られてフグは食べられなかった」という言葉  
がとび出しました。山口へ出発する時インタ  
ーネットのグーグルアースで立体的に山口市  
を出したかったのですが登載されて居らず一  
寸残念でした。

私にとっての故郷は家族と同じ位大切です。  
その山口を観光しやすい都市としてもっとP  
Rされることを心から願います。発展する山  
口にと様々な努力を重ねて居られる山口の方々  
に心から感謝しつつ、来年の帰郷を楽しみに  
過したいと思えます。

### 「私が思う山口の魅力」

藤井美和

故郷の大好きな自然といえば東風翻山です。  
新山口駅新幹線口へ降り北口へ抜ける連絡

春は後河原の桜と共に旧山口城の面影を残  
した旧山口高商の壕と石垣・・・之は残念な  
がら今はない。

初夏には谷川に光を映すホテルの群れ、殊  
に鱧石の重ね岩付近のホテル合戦、

夏は伝統の祇園祭  
秋は長門峡の紅葉狩り

冬はしんと静まる昔ながらの街並みと  
その名も床しい瑠璃光寺の五重塔

想い出は走馬灯の如く次から次へと心に浮  
び山口がなつかしい。

これからも希わくば昔ながらの伝統を秘め  
て落ち着いた俣の山口であって欲しいもの  
である。

これが私の故里だ。

さやかに風も吹いている

あ、おまへは何をして来たのだと

吹き来る風が私に云ふ。（中原中也）

皆さん、故里を、山口を、心にきざんでい  
つも想ひませう。

### 「私が思う山口の魅力」

藤永範行

私は今年八月に七夕会の末席に加えていた  
だくことができただけの若輩です、山口出  
身者として諸先輩方と同じ土俵で寄稿させて  
いただくこと大変、光栄に思っています。元々  
私は岩国出身であり、山口市には十四年居住

通路の窓から先ず東風翻山を捜し挨拶を送る。  
私の帰山の儀式です。東風翻山を見て初めて  
故郷を実感するのです。

この山には思い出がいっぱい。小学校の遠  
足、中学校での学年行事と折々に何度も登つ  
た。友と上半身裸になって山頂で咆哮した高  
校青春写真もある。幼児期から青春前期にか  
けて、身近で一番高いなだらかな斜面を持っ  
た美しい山として住民に愛着され存在してい  
た山だった。

小学時代の授業で鴻の峰城址へ登った時、  
梢の間から「なだらかな裾野の富士山の様  
な美しい東風翻山を見た」との思いがいつ頃  
からかずっとあった。しかし感傷旅行（二〇  
〇五年）で城址へ登り現実を知る。幾つかの  
峰が間にあり裾野なんか見えそうにない。そ  
れどころが頂上まで樹木に覆われた峰ばかり  
でどれが東風翻山かも定かでない。

遠く離れ年月も流れて現実は移る、想い  
出のみが勝手に膨らむ。中学時代、登山道を  
外れ杉林の道なき沢を上って東風翻山直下に  
出たときの感動シーンと混同していたようだ。  
山頂まで樹木に覆われ秀麗な姿を失った今  
の東風翻山には連絡通路からの感動は得べく  
もない。

感動再現と故郷発展を熱望してアイデア  
を記します。

東・西風翻山を登山初級コースとして一体  
整備して中高年の元気な健康志向者（登山ト  
レッキング）を全国各地から呼び込むこと  
です。

しているに過ぎません。二年前、社命により  
東京に転勤、全ての流れがまったく違う東京  
で奮闘するようになるのは五十歳を目前に考  
えもしませんでした。逆にこの二年で山口の  
ことを深く考えるようになりました。

山口の魅力といわれると異口同音に風光  
明媚な自然の宝庫、という言葉が返ってきます。

確かに一面正しい。ただそれ以上に山口は人  
としての人生修練・修行の場所であると常々  
考えています。東京は情報も多く、即断即決  
のビジネスの世界です。反面、人として内面  
の充実を図るには頼りないと感じる場面があ  
ります。

山口は昔から高邁な思想を生み出し、天下  
国家の中で精神性を説いてきました。その風  
土が山口には色濃く残っています。人は仕事  
のみに生きている訳ではありません。精神の  
鍛錬は続けねばなりません。

山口には人の心を癒し、次の活力に結びつ  
ける思想に裏づけされた動機を得られる土地  
の力があり、この高い精神性を文化的な仕掛  
け作りに活かし、山口から都会への人間形成  
の発信の場としての魅力を活かしたい。その  
ように考えると、現在進む高齢化も実は人の  
道を説き、目標を与えられる人材の宝庫であ  
るということになります。山口の大きな魅力  
は経験豊富な人の宝庫、これを山口の人間が  
忘れてはなりません。人を活かす道を探れば、  
山口は第二の維新の地となりえる場所。この  
山口の豊富な人材を活かす道は無いかと考え  
る次第です。

以前の斜面を再現して草スキー場をつくる。  
モニュメントを頂上に建てる。西風翻山との  
連絡路等を整備。立ち寄り温泉場を設置。休  
憩展望施設を作る。特に瀬戸内から関門の海  
が見える西風翻の最高の眺望は活用したい。  
キャンプ場を作る等々色々なアイデアが有  
ります。

具体化を是非お願いします。

### 「回想、化石の街山口」

藤永 忠

「ふる里は遠くにありて想うもの」と謳つ  
た歌人がいたが、私も故郷を出てより早六十  
年、東京と山口と遠く離れていても雨が降れ  
ば小雨に煙る山口、空青ければ緑に映える亀  
山の空と何かにつけて想い出すのは我ふる里  
山口の町である。

思うに四周を山に囲まれ今以上に発展拡張  
の出来ない山口は将に古い古い西の小京都で  
あり大内氏の昔よりの歴史を語り継ぎ静かに  
静かに眠り続けて来たが、一朝事あれば明治  
維新という激動の嵐を吹き興し、回天の偉業  
を成しとげたまちであり、以後は敗戦という  
嵐に耐えて今尚或いは今後当分静かに眠り続  
けるのではあるまいか。

山口は歴史と伝統の古い町ではあるが、一  
旦事あれば嵐を呼ぶマグマを蔵した不思議な  
化石の様な街である。

### 「私が思う山口の魅力」

三好耕之

私は昭和十四年、満州の奉天省撫順市に生  
まれました。撫順市は満鉄の附属地として近  
代的市街化がなされ、ガス、水道、水洗便所、  
冬は各室スチム暖房、言語は標準語と言う  
環境で育ちました。終戦後昭和二十一年八月  
に帰国、以来高校卒業まで山口市で過ごし  
ましたが、帰国当初は環境の変化に戸惑いま  
した。特に「トイレ」には恐怖感があり、夜  
は三歳年上の兄に付合わされたものです。

住まいは「今道」現在の「黄金町」。山口  
駅の近くで、よく蒸気機関車を見に行き貨車  
の入替えの時に乗せてもらい、釜に石炭を投  
入するところを見せてもらったり（あの時代  
はおおらかでした）、亀山公園や近くの山に  
「椎の実」を採りに行き、山の管理人に鎌で  
追いかけられたりと、山口の環境に馴染んで  
ゆきました。寺社をはじめ歴史的な建造物や  
祭り行事が普段の生活と融合して時が過ぎて  
行く。「除夜の鐘」と共に始まる「五社参り」。  
今は出来ないのですが「五重塔」を囲ん



での「お花見」、源氏螢見物の「ほたるがり」、夏休みの始まりは「祇園さま」、八月には「ちようちん祭り」、秋の終わりの「古熊天神祭り」等々、私もいつの間にかその中に溶け込んで成長してゆきました。

上京して生活するうちに「山口」が「ふるさと」と感じるようになりました。

大陸での生活は、当時としては世界に誇る近代的な生活だったかもしれないけど、七十歳を前にして「ふるさと山口」の歴史と文化の魅力に益々とりつかれて、歴史的記述をみつけると「在京の中学同期生」に「知識の押し売り」をしています。

「ふるさと」を離れてこそ価値が分かるものです。安っぽい「観光地づくり」に走らず、大内（室町）時代からの生活の延長上に在る「市民の潤いづくり」を目指していただきたいと思っています。元氣な老人が勤勞奉仕してもいいではありませんか。私も参加したいと思っています。

### 「私が思う山口の魅力」

持山銀次郎

山口の皆さんお元氣ですか。私が大好きなふるさと山口市黄金町、昔の今道を離れ、上京して四十一年が経ちました。今夏、白石中学校の還暦同窓会が湯田温泉、ホテルニュータナカで開催されました。総勢九十三名の顔、

しかし、その山口に、物足りなさを感じることも事実です。ほかの都市にそれほど詳しいわけではありませんが、これまで訪れた土地の中には、強烈な個性を備え、魅力を持った都市が幾つもありました。思いつくまに挙げると、飛驒の高山や奈良、姫路、倉敷、尾道、長崎、柳川、鹿児島などでしょうか。そうした都市に比べると、どうも山口市は頼りないと言いか、印象が淡白なんです。

JRのコマーシャルに「そうだ 京都、行こう」というシリーズがありますが、「そうだ。山口に行こう」と思わせるような観光資源（あまり感しのいい言葉ではありませんが）がほしいところです。幸い空襲を免れたのに、古い街並みが格別保存されているわけでもなく、大内文化に浸れるような施設もありません。かなり突飛な提案だと自分でも思いますが、例えば、鴻の峯にかつてあったと伝えられる城を復元する、大内氏の居館を再現する、韓国文化館や回天博物館をつくる、観光客に大内人形つくりや外郎つくりを体験させるといったことは考えられないでしょうか。「山口に行つて〇〇を見てきたよ」と自慢話ができる、そんな魅力的な山口になるといいですね。

### 「雲道人をご存知でしょうか」

八木重二郎

顔、顔。懐かしい想いとともに、月日の流れの不思議さに、何とも言えない心の高揚を覚ええました。

そんな折、友人の児玉氏の紹介で、今年「山口七夕会」の会員になったばかりの私に「私が思う山口の魅力」について寄稿の要請がきました。いざ筆をとると、「山口の魅力？」。

私が思う長州山口の魅力は、歴史が証明しているように、「理想に燃え情熱的で、かつ人情味溢れる人に優しい心」この一言につきるのではないかと思います。この心が人と人とのつながり、和を作り魅力ある山口の風土文化を形成しているのでしょうか。そして、山口の四季の景色。盆地の山口は、夏は蒸し暑く冬は寒い。一の坂川の桜、螢、大好きな瑠璃光寺の五重の塔、静寂なたたずまいの大神宮。また、山口は、よく西の京都と云われますように、祇園祭、七夕祭り、ちようちん祭りが伝統となっています。

たまたま、この夏、京都祇園祭を見物する機会があり、その風情と猛烈な蒸し暑さに山口の祇園祭を思い出し、幼少の頃、浴衣を着て母親に連れられて行った、祇園祭の裸ん坊の勇ましき、肩車をして貰って、見たちようちん祭りの賑わいを本当に懐かしく思い出しました。そして、何と言っても、冬の夜空にきらめき輝く、無数の星の美しさでしょう。もう一つは、安倍晋三前総理大臣が、諸外国訪問の折りに、お土産として持参された伝統工芸品の「大内塗り人形」これらが、「私が思う山口の魅力」です。

久しぶりに、東京で雲道人の名前に接したのは、京王百貨店の古書市会場だった。家内が突然、「雲道人て、あの人？」と言って書棚を指差すので、手にとってその立派なB4版の本を取り上げた。間違いない。あの雲道人がこんなに立派な本になっている。早速買って帰り、その夜、父からもらった雲道人の作品とその画集を見比べながら、在りし日の父の思い出に浸り、楽しいひと時を過ごした。

雲道人・小林全鼎は、東京浅草に生まれ、京都、三重などを遍歴した後、戦火を避け山口に疎開、以来八十歳で亡くなるまで三十年近くを、この山口の地で過ごした禅者にして、漢詩、書画、篆刻をよくする芸術家である。

私の父は生来、道具好きで、雲道人の作品をかなり集めたようだ。最初は、雲道人のことを、田舎には珍しい「書画、篆刻の上手い道楽者」程度にしか考えていなかったようだが、その評価が一変したのは、雲道人の自決の経緯を知ってからである。以後は、彼のことを「大変な男だったのかもしれない」、「やはり、すごい芸術家だ」などとしきりに感心していたのを思い出す。

その後しばらくして、小林東五という陶芸家のことを知ったが、驚いたことに雲道人の御子息とのこと。山口で雲道人の薫陶を受けて育ち、全国を歴訪の後、対馬に窯を築かれ、一説には、細川元総理の陶芸の師匠ともいわれるかなり高名な陶芸家である。

当然のことながら、漢詩、書、篆刻にも堪能で、節々に父君雲道人を深く尊敬されてい

最後になりますが、長州山口は、日本の国が忘れかけている誇り、志、そして日本人の心、人情味、思いやりの心がまだ残っていると思います。今こそ長州山口は、その発信源として、この二十一世紀に「豊かな心、日本」を復活させる担い手となること、そうすることが、ふるさと山口の未来をも創るものであると信じております。

### 「私が思う山口の魅力」

森脇逸男

山口市に感じるのには、懐かしさであり、自分を育ててくれた街への特別な感情であり、感謝の気持ちです。いろいろな言葉、イメージが、脈絡なく浮かんできます。大内文化、サビエル、瑠璃光寺、雪舟の庭、鳳雛山、鴻の峯、姫山、亀山、榎野川、後河原、湯田温泉、中原中也、嘉村磯多、種田山頭火、外郎、舌鼓、そして旧制山口高校……。

実は私は、生まれたのは兵庫県西宮市、本籍地は岩国市で、山口市に住んでいたのは一九三九年、小学校二年生のときから一九四九年、旧制山高の一年次を終えるまで、僅か十年間に過ぎません。それでも、「ふるさと」と思うのは、やはり山口市ですね。今はもう親類もいなくなり、知友も僅かな数になってしまいました。目をつぶると、懐かしい山口の風景が浮かんできます。

ご様子が観えるが、何よりもその作品がすばらしく、私の父の好みでもある。

父が亡くなって三十年近く経つから、雲道人の立派な作品集のことも、その息子が高名な陶芸家になられたことも知らないが、かつての「雲道人ファン」としてさぞ喜んでいてことだろう。暇が出来たら、一度ふるさと山口を訪れ、雲道人の足跡など確かめてみたいものだ。

### 「私が思う山口の魅力」

矢原武紀

私は六年前から絵画を描き始めた。主として油絵だが、たまには水彩画を描くこともある。風景が主たる対象である。私は、年に三〜四回山口市小郡の実家に帰省するが、その折には、描きたくなる風景を求めて、スケッチブックとカメラを携行して小郡や山口市の旧市街をぶらぶらと徘徊することが多い。

小郡では自転車や徒歩で、また、山口の旧市街ではJR山口線で山口駅まで行き、あとは自分の脚で歩き回る。小郡では、栄山公園や其中庵のある山手から矢足の辺り、また四十八瀬川を柳井田から新町西、湯の口の方へ廻った辺り、あるいは八方原から権現堂方面などにも脚を伸ばしたが、現在までに絵画として実現したのは、「栄山公園」と「四十八瀬川」の計二枚（水彩画）である。一方、旧



山口市街では、パークロード・亀山公園・サビエル記念聖堂周辺や、瑠璃光寺五重塔のある香山公園辺りは何度も足を運んだ。今までに「パークロード付近」と「五重塔」を油絵でそれぞれ八号と六号で描いた。

小郡の素朴な風景も捨てがたく、これからも小品でよいから何枚か描きたいと思うが、一方、山口旧市街は描きたい風景の宝庫である。特に、サビエル記念聖堂、旧県庁の建物、山口大神宮、常栄寺雪舟の庭周辺などは近いうちに描きたいと思っている。また少し離れているが、吉敷の「龍蔵寺」や「鼓の滝」はこれからは是非訪れてみたい所である。ともあれ、絵を描くことを趣味に持つ者にとって山口を故郷に持つ幸せをしみじみと感じている今日この頃である。

### 「あの瑠璃光寺さんが菩提寺！」

山根和也

猛暑だった昨年のお盆、久しぶりに帰山して両親の墓参りをしました。

我が家の菩提寺はあの瑠璃光寺さんです。あまり知られていませんが、このお寺は、その昔、私の出身地、仁保・高野にあったのです。三〇〇年以上も前（元禄）、利便性を重視した毛利氏が仁保・瑠璃光寺を現在の場所に移転させたとか（移築の跡地近くには、現在ミニ五重塔が建っています）。そのため

しようか、仁保地区には瑠璃光寺さんの檀家がとても多いようです。昨年のお盆法要にも、仁保地区檀家総代の兄はお墓の草取りをしたり、檀家受付の裏方に汗を流していました。仁保・高野の地には山根家先祖累代のお墓があります。この美しい瑠璃光寺さんの地に私は眠ることができるか？それとも妻や家族が建てた神奈川・相模原の墓苑に眠ることになるのか。最近、この点が不明なためなのか、

「ころろ落ち着かず」の心境です。瑠璃光寺に宝石で言えばラピスラズリの光。この由緒正しき名刹の懐に抱かれることができるか、それとも家族の住まいに近い、仁保荘園の発祥の地・神奈川の地が最後の棲み家となるのか、思案投げ首です。

ひとつ「千の風さん」に訊いてみたい！

### 「私が思う山口の魅力」

山本和生

五周年記念誌には、豊かな歴史と美しい自然に恵まれた郷里山口市を誇りに思うと書かしてもらったが、山口七夕会の十年の活動を通じて会員に有能な人材が多くいらっしやることを強く感じてきたのでこの十周年記念誌においては、多土済済ということをも山口市の誇りとして付け加えたいと思う。

ただ同郷のよしみだけだということではなくて会員一人一人の優れたお人柄や識見に接している。同じく檜皮葺きの屋根をもつ奈良の室生寺の五重の塔も、木立ちの中にあつて趣きがあるが、朱塗りの艶やかさは、可憐ではあれ、落ち着いた風格を感じさせることはない。山形の羽黒山の森の中に入り込んだ所に、にわかに現れた五重の塔に、私は一瞬山口の五重の塔と同じものを見たような気がして驚いたことがある。ただ、森の中に立つこの楠葺きの塔にはのびやかな明るさを感じなかった。建物自体は似ているのだがそれらが立っている風景が全く違っているからだろう。山口の塔の場合、背景にある緑の小高い山と空、手前にあつて塔を映す池、これらがその塔の穏やかな佇まいを絶妙にひきたてているのだ。

一四四二年に完成したというこの塔を、雪舟（一四二〇～一五〇二または一五〇六年）もサビエル（一五〇六～一五五二年）もまた眺めていたのだろう。

雪舟を中国に渡らせそのダイナミックな水墨画の完成を支援し、荒廃した京の都を諦めたサビエルを迎え入れてキリスト教の布教を認めた大内氏の都山口は、当時日本随一の豊かな文化の都であった。瑠璃光寺の五重の塔は、そんな大内文化の名残を今に伝えている。大殿大路に住んでいた私が中学の頃からジ

していると長く世話係として会の発展に微力を尽してきたことが報われる思いがする。これからもたくさんの方に山口七夕会の活動に参画していただき山口七夕会での交流を楽しんでいただきたいものである。

### 「私が思う山口の魅力」

山本克之

私は今、横浜に住んじますが、故郷山口とよう似ちよると思うとります。よく「あなたは横浜に住んでいますか、いいですね」と言われます。知らん人は横浜を大都会と思うちよつてですが、そりやあ違いますいね。

中心街は伊勢佐木町・関内から中華街・元町まで、歩いて廻れる程ぶち小さいです。みなとみらいは最新ですが、ゆめタウン山口と同じで、ありやあ中近東のドバイみたあな所ですいね。最近世界的に不況で、横浜でも老舗N沢屋の流れをくむM坂屋が閉店しましたが、山口でもシンボルのC百貨店がおごとと聞きました。中心街の横濱駅は中心街からは離れちよります。小郡（新山口）駅と旧山口市街みたあなもんです。横濱駅東口は巨艦デパートSが出来る前はプールとバス停しかなくて夜はうすら寂しい所でした。小郡駅南（新幹線）口は出れなくて田んぼじやつたと思えますがねえた。一方の横濱駅西口とて今でこそ一大歓楽街ですが、昔は婦女子は

ヨギングをするコースは、この塔まで登ってきて下るというコースだった。今も、帰省した折にはこの塔を見に行く。静かに安堵させてくれる力がそこにはある。

### 「私が思う山口の魅力」

吉富和彦

山口を出て六十年以上になるが、多感な青春時代を過ごした山口の町はやはり懐かしい。山口は父と母のすごした地、特に仁保は母の故郷でもある。だから山口弁は私の心にしみ込んでいる。

約六五〇年前、大内弘世が創った小京都山口は、鴻峰群を借景として一の坂川・堪野川に蜚飛び交う美しい自然と、龍福寺・瑠璃光寺や雪舟庭・重源の郷などの史跡に恵まれている。近年、教育都市から芸術・文化都市への発展の道を歩んでいて、頼もしいかぎりである。

私が四十年以上も住み、第二の故郷ともいべきこの横浜市磯子区のと、山口市との関係が非常に深いことを知ったのは、当地に来てからのことである。

鎌倉時代初期に地頭として下向し、仁保源久寺を建立した平子重経は、磯子を中心とする平子郷を三〇〇年以上に亘り領有した平子氏の支流といわれる。重経を始祖とする周防平子氏は、大内氏から毛利氏の家臣として活

### 「瑠璃光寺の五重の塔」

横田理博

まあそうは言うても、両者の決定的な違いは「人口」で、巨大三六〇万市民の横浜市に、平成十七年に一市四町が合併して出来た「新生・山口市」ですら約二十万人と、足もとにも及びませんわあねえ。やっぱり二分に一本の電車のダイヤと、一時間に一〜二本の自動車（親は未だにそう呼ぶ）のダイヤとの差じゃろう。「あー、なんと、おおらかで、静かな山口よ!!」これが山口の魅力と思うちよります。

山口の誇りは瑠璃光寺の五重の塔だと思ふ。幼い時から馴れ親しんでいるせいでもあろうが、この塔ほど落ち着いた雰囲気を感じ出している五重の塔を私は見たことがない。

躍し、仁保氏・三浦氏と名称を変えたものの、三十八代まで八百年以上にわたり脈々として続く名門である。

母の家系はその六代から、父は二十一代から分かれたことを知ったのは、磯子に来てからのことで、先祖が取りもつ縁を痛感する。

自宅近くに龍珠院という古刹がある。先代の住職は仁保法雲院で修行を積んだ篠目出身で母方の縁続きと聞き驚きは倍増した。法雲院には平子氏二十代仁保隆在の墓もある。

今年十一月には、磯子祭りの区民行事に「中世磯子の領主平子氏とその謎に迫る」と題し講演をすることになり、今準備に奔走している。

十六万の人口を擁する横浜市磯子区と合併により十九万に拡大した山口市は、共に中堅都市の規模である。この両地域が平子氏を絆として、よい関係を結ばれることが、私の夢である。

「猪狩りの山本勘介を探る」

渡辺勝正

山本勘介は、甲斐の武田信玄に仕えて天下に名をなしたが、武田以前は山口の大内義隆に仕えていたという伝承が山口にある。

勘介は讃岐の庄屋に生まれ、武者修行のために山口に来たが、勘介は猪狩りの名人であったという。私はこの「猪狩りの名人山本勘

ばかりである。

介」に強い関心をもっている。甲斐武田史の基本史料である『甲陽軍鑑』には、勘介の猪伝説はないが、近松門左衛門の浄瑠璃には、勘介の猪狩りの話が出てくる。近松の浄瑠璃は、山口の伝承と何か関わりがあるのだろうかと思いついたが、近松が長州（長門・深川）の出身であることを知って、一条の光明を見る思いであった。美祢市在住の宮原英一氏が、著書『近松門左衛門の謎』で近松は長州出身であると研究発表されている。

近松の浄瑠璃は山口弁（長州方言）で書かれていることを鍵にして、宮原氏は綿密に調査し、従来の近松門左衛門「福井出身説」を覆して「山口出身説」を主張され、いまや広く認められている。近松が長州出身であれば、浄瑠璃が長州弁で書かれていることに納得がいく。

「ちごうた（違った）、しぬる（死ぬ）、のきょうか（除けようか）、しまう（片付ける）、よつぼど（余程）、いかい（大きい）…」

毛利文書の『萩藩閩閩録遺漏』の中に、「元甲州武田の臣山本勘介の後胤」という記録がある。勘介の子孫が毛利家に仕えたという書面を藩主に差し出したのは、三隅下村の山本源兵衛とある。

「三隅」といえば、近松が育ったと考えられる「深川」に近い。近松が少年時代に聞いた勘介の猪伝承を、浄瑠璃「信州川中島合戦」で、「猪狩り」を登場させたのではないだろうか。山口に関する歴史のロマンは、深まる

(名称)

第1条 本会は、山口七夕会と称する。

(目的)

第2条 本会の目的は、次のとおりとする。

- (1) 会員相互の親睦を図り、教養を高める。
- (2) 郷土山口市との連絡を密にし、情報交換を行う。
- (3) 郷土山口市の発展に寄与する。
- (4) 上記各号に付帯する諸活動を行う。

(会員)

第3条 本会の会員は、郷土山口市を愛しその発展を願う個人で次条に定める入会手続を経た者とする。

(入会)

第4条 本会に入会しようとする者は、入会申込書（様式第一号）に所定の事項を記載のうえ、これを本会に提出して入会の申し込みを行う。

(定時会員総会)

第5条 本会は、毎年一回原則として八月に定時会員総会を開催する。

- 2 前項に定めるほか必要がある場合は、随時に臨時会員総会を開催することができる。
- 3 会員総会は、会長が招集し議長となる。会長に事故ある場合は、副会長がこれに当たる。
- 4 会員総会の決議は、出席会員の過半数をもって決する。

5 会員総会においては、本会則に定めるもののほか事業報告および決算ならびに事業計画および予算の承認、本会則の変更ならびにその他幹事会が定める事項について決議する。

(幹事および監事)

第6条 本会に十五名以下の幹事および二名以下の監事を置く。

- 2 幹事は、幹事会を構成し、監事は本会の会計を監査する。
- 3 幹事および監事は、会員総会においてこれを選任する。
- 4 幹事および監事の任期は、選任の翌々年に開催される定時会員総会終結の時までとする。

なお、増員または補欠により選任された幹事および監事の任期は、それぞれ他の現任幹事および監事の任期と同じとする。

(会長)

第7条 会員総会の決議により会長1名を定める。

- 2 会長は、会務を統括し本会を代表する。
- 第8条 会長の指名により幹事の中から副会長および会員の中から顧問各若干名を置くことができる。
- 2 副会長は、会長を補佐し、顧問は会長の諮問に応じて会長に助言する。

(幹事長)

第9条 会長の指名により幹事の中から幹事長1名を置く。

2 幹事長は、会務の処理に当たる。

(幹事会)

第10条 幹事会は、会長が招集し議長となる。会長に事故ある場合は、副会長がこれに当たる。

2 幹事会の決議は、出席幹事の過半数をもって決する。

(会計年度)

第11条 本会の会計年度は、毎年四月一日から三月三十一日までとする。

(年会費)

第12条 会員は、一会計年度当たり金一千円の年会費をその会計年度の始まる三十日前までに納入しなければならない。

なお、会計年度の途中において入会する場合であっても全額を納入しなければならぬものとする。

2 五会計年度を超えない会計年度の年会費を一括して前払い納入することができる。

この場合その会計年度の間には年会費の変更があったとしてもその差額について精算することはしない。

(寄付金および補助金)

第13条 本会は、寄付金および補助金を受けることができる。

(事務局)

第14条 本会の事務局は、山口市企画経営課にこれを置く。

附則

この会則は、平成十一年二月六日から施行する。

附則

この会則は、平成十一年七月三十一日から施行する。

附則

この会則は、平成十六年七月三十一日から施行する。

附則

この会則は、平成十七年七月三十日から施行する。

役職名	氏名	職業等
会長	原野 和夫	時事通信社顧問
副会長	石田 順康	
副会長	縄田 香苗	
幹事長	山本 和生	帝人化成(株)会社管理本部長付
幹事	原田 俊明	(株)東放制作取締役社長
幹事	八木 重二郎	東日本高速道路(株)代表取締役会長
幹事	末繁 哲雄	宇部興産(株)常務執行委員建設資材カンパニーバイスプレジデント
幹事	久永 洋子	桜圃会(山口県立大学同窓会)元関東支部長
幹事	平林 英昭	弁護士(平林英昭法律事務所)
幹事	竹重 高志	(有)旦建築計画代表取締役・一級建築士
幹事	安田 宏	税理士(安田宏税理士事務所)
幹事	大和 みち子	桜圃会(山口県立大学同窓会)関東支部長
監事	藤田 光博	山口銀行取締役東京支店長
顧問	児玉 啓一	山口県東京事務所長

平成21年3月現在

発行日 平成21年3月

発行元 山口七夕会事務局

〒753-8650

山口市亀山町2番1号 山口市総合政策部 企画経営課内

TEL 083-934-2746 FAX 083-934-2642

e-mail [tanabata@c-able.ne.jp](mailto:tanabata@c-able.ne.jp)URL <http://www.c-able.ne.jp/~tanabata/>